長岡市長記者会見要旨

日　時：令和２年12月７日（月）午後２時から
会　場：アオーレ長岡東棟４階　大会議室

【会見項目１：戦前から戦災復興までの記憶をより鮮明に表現！
白黒写真７枚のカラー化により戦災体験を継承】

（市長）

このたび長岡市は、渡邉英徳・東京大学大学院教授と新潟日報社との共同で「『空襲から復興へ』写真カラー化プロジェクト」により、ＡＩ画像認識と体験者からの聞き取りによって、白黒写真７枚のカラー化を行いました。

今年は長岡空襲から75年の節目にもかかわらず、新型コロナウイルスの影響で、平和に関する行事が縮小されたほか、空襲体験者の体験談を直接聞くことも難しい状況が続いていました。また、空襲体験者の高齢化も進んでいることから、新しい発想、新しい技術による戦災体験の継承を模索しました。今回のプロジェクトにより、空襲体験者の記憶やその経験からくる思いの継承を図っていくことができ、今後もこうした取り組みを続けていきたいと思っています。

モノクロ写真を単にＡＩでカラー化するだけではなく、体験者への聞き取りを行い、記憶に基づいた補正をすることで、よりリアルな色彩化ができました。また、このプロセス自体が平和活動の大きな力になっていくという確信を持ちました。

今回カラー化を行った７枚の写真は、12月８日から21日まで、まちなかキャンパス長岡で展示します。その後は長岡戦災資料館で閲覧に供します。また、来年１月以降にアオーレ長岡で展示したいと思っていますので、ぜひ市民の皆さまにご覧いただき、家族や地域で世代を超えた交流のきっかけにしていただければありがたいと思っています。

（イノベーション推進課課長補佐）

本プロジェクトの作業の流れを説明します。

まず、白黒写真を渡邉先生がＡＩによってカラー化します。

次に、カラー化した写真を長岡市側で体験者に見ていただき、当時の色の記憶とともに体験談や思い出を聞き取ります。５人の体験者に延べ６回の聞き取りを行いました。

そして、聞き取りで挙げられた色の補正意見を渡邉先生が反映しつつ、全体のバランスを整え

て、一つの写真のようなものに仕上げていきます。

この作業は大きく二つに分けられます。

一つは色を直していく作業です。色に関する証言を最優先にしながら、有識者や文献を基に証言の補強や、証言と関係ない部分の色の検証なども行いました。あくまで永遠の未完成という気持ちであり、今後も色に関する意見があれば反映していくことも検討したいと思っています。

もう一つは、色をきっかけにして思い出されることを証言、体験談として聞き取る作業です。着ている服、車、建物、道路の舗装といった具体的なものを見ていく中で思い出される話を聞き取ることで、戦中戦後の生活や社会の様子など、当時の状況を知ることができたという手応えがありました。

それでは、それぞれの写真について説明します。

１枚目は、柿町の広西寺を学寮とした東京の駒沢国民学校の疎開児童の写真です。疎開児童の表情がとても明るいのが印象的です。これは戦争が終わり、近日中に東京の親元に戻るという状況で撮られた写真です。

最初は市内中心部に滞在していたそうですが、柿町に再疎開したそうです。聞き取りした体験者の中には、同じ小学校で仲良くなり、柿町まで送っていったという人もいました。

また、写真の中に着物から作ったと思われるモンペを着ている人がいて、こういったことはよくあり、自分は叔母が花柄のカーテンで洋服を作ってくれたという話もありました。

写真の背景の緑はＡＩの着色からほぼ変わっていません。木々や雲や空といった自然物はＡＩが得意とするところで、人間が着色すると非常に時間がかかるうえ絵のようになってしまう点をＡＩが補っており、まさに体験者とＡＩの共同作業です。

２枚目は、表町２丁目の被害状況の写真です。今のまいまい姫あたりから北側に向けて撮ったものと考えられます。

なんといっても長岡六十九銀行の存在感が挙げられます。場所は現在の北越銀行の研修センターあたりです。最初ＡＩはグレー色を付けていましたが、体験者の皆さんはこの存在感を覚えていて、これは赤いレンガ色がすすけてこげ茶色になったと言われ、修正を施しました。当時、駅東あたりから信濃川方面を見ていた人からも長岡六十九銀行の建物だけが残っていたと伺っています。

また、土蔵がいくつか写っています。この辺は現在でも家の裏手に土蔵が残っていますが、昔は問屋街や呉服街が連なっていて、長岡一羽振りのいい人たちの街であったという話を伺うことができました。

がれきの色については、生きるのに必死で覚えていないという話や、昭和22年に長岡花火が復活したときに、大手通りあたりは復興したが裏手はまだがれきが残っていて、がれきの上で花火

を見たという話を聞くことができました。

３枚目は、昭和20年11月頃の大手通りの写真です。長岡駅前あたりの大手通りで撮られたものと思われます。左に安栄館、右に現在の北越銀行本店の位置に当時あった北越製紙が写っていると聞いています。この写真は色に対する指摘はなく、ノイズの修正が中心でした。

４枚目は、昭和25年に行われた新潟県産業博覧会、長岡博の正面切符売場の写真です。現在の神田小学校の場所で開催された長岡博の会期中のものと思われます。

ＡＩは奥に写っている船を茶色く表現しましたが、船はもっと明るく派手な赤だったという話があり、赤みを強く出しました。お聞きした人は皆さん長岡博に行ったとのことで、長岡の人はみんなうきうきしていて、長岡のまち全体が明るい雰囲気だったという話を伺いました。そのため色調は明るくしたりしました。

５枚目は、戦災復興の土地区画整理がほぼ終わった昭和30年の長岡駅前大手通りの写真です。色については、看板の文字の赤色をもう少し明るく、当時は長岡駅前にあった平和像をブロンズらしい色にという話があり修正を施しています。

この写真を見て、長岡は非常に早く区画整理ができたなど、復興に至るまでの話を多く聞くことがでました。

写真の中央部分に写っているお巡りさんが立つボックスを見て、お巡りさんが笛を吹いているところが都会らしく格好よかったとか、平和像の周りに腰かけておしゃべりをしたといった、ゆとりができたような話も伺うことができました。

６枚目は、出征する清水健治さんを送る家族、親戚の写真です。真ん中に写っているお子さんが写真を提供いただいた清水誠一さんです。この服の毛糸のセーターは、毎日着ていて茶色で間違いないと伺いました。額装の金色なども非常によく覚えていると伺っています。

最後の７枚目は、父親のお見舞いに行った村松陸軍病院で撮影された金子家の家族写真です。真ん中に写っているお嬢さんが写真を提供いただいた金子登美さんです。

この写真で金子登美さんから初めに言われたのは、父の陸軍の帽子の赤色は子ども心に非常に覚えているということです。また、カラー化によりお姉さんの服に水玉の柄が出てきたことに驚き、また登美さんの服に出たストライプの柄を見た瞬間には、この服の手ざわりまで覚えているという話がありました。色も少し黄色がかったクリーム色だと伺うことができました。

この写真の原本は、金子登美さんが戦災資料館で空襲の話をするときに着けている名札の裏に入れているそうです。非常に大切にされていて、これが唯一の家族の写真であり、家中が一番穏やかでいいときだったと思うという話をされていました。

このプロジェクトを通しての感想としては、カラー化によって白黒写真しかない時代に色があったということに気付き、同じ空間を共有しているような感覚を覚え、表情が豊かに見えること

で、その時と同じ気持ちになれたと思いました。そして空襲で何もなくなったことに絶望したところから10年で立ち直ったことに誇りを感じました。白黒写真の向こう側としか感じられなかったことが少しでも自分ごとのように感じられたように思います。

戦争を体験した人は「思い出す」ということによって、戦争を知らない我々の世代は「想像する」ということによって、それぞれ心を揺さぶり、そして世代を超えた対話につながったと思います。今後、市民の皆さんからもご覧いただき、家族や地域の中で世代を超えた対話が生まれればいいのではないかと思っています。

（渡邉英徳・東京大学大学院教授）

長岡市の貴重な写真をカラー化するお手伝いをすることができ、とても光栄に思っています。

私が写真のカラー化に取り組んだきっかけは、2010年頃から取り組んでいるデジタルアーカイブによる記憶の継承の研究で行った、広島、長崎の被爆地の資料をグーグルアースのデジタル地球儀の上に乗せて多くの人に伝えるというプロジェクトにあります。このプロジェクトの中では、70年以上も前の出来事について、多くの人が白黒写真の資料をじっくりと見てくれないという問題がありました。しかし、2016年頃から人工知能によって白黒写真を自動的にカラー化する技術のレベルが高まり自由に使うことができるようになりました。そこで初めて試したときに本当に驚愕しました。どういう情報デザインによって過去の出来事を未来に継承すればいいのかということを考え続けていた私自身が、戦中戦後の風景を白黒でイメージしていたということに改めて気づかされました。その後ずっとこの取り組み続けています。

今回の長岡市のプロジェクトの一番の特色であり、最も重視したことは、カラー化そのものではなく、これに関わった長岡市のスタッフ、新潟日報社の記者の皆さんが写真に写っている出来事について詳しくなったということです。カラー化するという目的の下にたくさんの人が対話を重ね、私のような研究者や市の職員、新聞記者など立場の違う人たちが共通の土俵の上で過去の出来事についての対話を深めていくということに大きな意味があります。

これまでは、歴史家がさまざまな資料を基に調査、聞き取りを積み重ねて歴史を著述してきましたが、今回の取り組みは、それをさらに広げ、さまざまな立場の人が参画してパブリックなヒストリーをつづっていくという営みとして捉えることができます。

当時の写真は各家庭に眠っているものなどたくさんあります。それらを再び掘り起こし、我々が生きている現在と70年以上前の出来事を地続きに考える第一歩だと思っています。

新潟日報の朝刊で大きく取り上げられている様子を見て、カラー化写真がたくさんの長岡市民の自宅に届き、各家庭でその時代についての対話が生まれたのではないかと想像し、とても喜ばしく思いました。今後も末永くこのプロジェクトに関わらせていただきたいと思いました。

（記者）

カラー化した７枚の写真を見た市長の感想をお聞かせください。

（市長）

白黒写真に閉じ込められていた過去というものが、現代につながるものであるということを感じることができる写真になったと思いました。空襲体験者が高齢化している中で、体験の継承をするための大きな力になるということを強く感じました。

これからも戦争体験者や家族、また広く市民の人達に関わってもらいたいと思いました。

（記者）

渡邉先生は、今回の新潟日報社とのプロジェクトのほかに、各地方紙と同様のプロジェクトを進めているのでしょうか。

（渡邉英徳・東京大学大学院教授）

愛媛新聞、山陽新聞、北日本新聞、岩手日報とそれぞれ違うテーマで同様の取り組みをしました。これまでの取り組みは新聞社が調査をしていましたが、今回の長岡市のように、市が主体となったところは初めてだと思います。

（記者）

75年前のことで体験者の記憶が変容してしまうこともあると思いますが、体験者への聞き取りから、どのように色を決めていきましたか。

（渡邉英徳・東京大学大学院教授）

その点は常に注意しました。非常に克明に覚えていて、一貫性があることを話す人もいますが、70年以上前のことを思い出すことは難しく毎回違うことを言う人もいます。その場合は可能な限り客観的な資料を調べた上で、当時のことを知る人に見ていただき確認しました。

ただし、家族写真のように個人的なものは資料で色を確かめられないときもあります。その場合は、なるべく本人が覚えている色を再現します。これは完璧な色の再現は不可能なので、対話のきっかけとしてカラー化を用いるという考えです。

（記者）

今回カラー化した７枚をさらに進化させる計画やカラー化写真を増やす考えはありますか。

（イノベーション推進課長）

今回のカラー化写真７枚は、展示やホームページへの掲載、空襲体験などの継承に活用していきたいと思っています。それらの反響なども見ながら、今後の在り方を検討していきたいと思っています。

（記者）

空襲体験者の高齢化が進んでいますが、カラー化写真の取り組みを今後の継承活動でどのように取り入れていく考えですか。

（市長）

空襲体験の継承のため、アーカイブに残す手段にとしてカラー化写真の枚数を増やしていきたいと思っています。

（渡邉英徳・東京大学大学院教授）

このカラー化写真を基にした記憶の継承活動を展開していく上で、若い方に積極的にアイデアを出してもらうような場を作れたらいいと思います。

【会見項目２：長岡技術科学大学・NOSAI中越と連携
ドローンを活用した鳥獣被害対策を推進】

（市長）

ドローンのノウハウがあるＮＯＳＡＩ中越、長岡技術科学大学の山本准教授の協力の下、ドローンを活用したニホンザルの生態調査を、近年、特にニホンザルやクマによる被害が多くなっている栃尾地域で実施します。

これまで、例えばニホンザルの生態についてはテレメトリー調査を行ってきましたが、正確な頭数、生息域を把握することが難しいという状況が続いていました。

そのため、赤外線カメラを搭載したドローンで、人が立ち入ることが難しい森や林の中においても上空から撮影し、目視では困難な個体調査を実施します。

また、市議会12月定例会にドローン１台の購入に係る予算案を提案しています。これは、市街地でイノシシ、クマなどの出没件数・地域が拡大していることを踏まえて、人身被害防止などへ幅広く活用するためのものです。

農業被害、人身被害の防止のため、関係機関、住民の皆さまと連携して、まずはしっかり調査をしたいと思います。また、鳥獣被害対策については、この冬のイノシシの捕獲をはじめとして、来年度予算でも新たな対策事業を考えており、後日また発表できると思っています。

（記者）

長岡市内におけるニホンザルの生息状況について、群れの数と頭数が分かれば教えてください。また、ドローンによる調査はニホンザルのほかに、イノシシなどの鳥獣にも応用できますか。

（環境政策課長）

長岡市のニホンザルについては、四つの群れを確認しており、頭数は全体で約200頭と把握しています。

（農水産政策課長）

イノシシについては実際に、昨年度ドローンの赤外線で捉えられることを確認しています。これらの鳥獣に対しても、生息地域、出没地域の把握に活用できると考えています。

（記者）

どのようにドローンを使ってニホンザルの頭数を確認するのですか。

（環境政策課長）

現在ニホンザル６、７頭に発信機をつけてあり、それにより群れの位置を捉え、そこにドローンを飛ばし赤外線カメラでおおむねの頭数を把握できると考えています。

一つの群れの適正頭数を40頭として管理する必要があると考えており、今後のわな設置や捕獲の数の目安になるとに考えています。

（記者）

今回のようなドローンの活用は、ほかの自治体などでも行われているのでしょうか。

（農水産政策課長）

いくつかの自治体で、イノシシの生態を調査するためにドローンを使っています。また、市街地に出没するクマの監視等に使うという自治体もあります。ドローンによるサルの調査については、長岡市で４月に１回やっており、今のところサルに関しては長岡市が比較的進んでいると考えています。

（記者）

サルによる農業被害額を教えてください。

（農水産政策課長）

聞き取りにより、約100万円と把握しています。ただし、自家菜園の被害など、被害額には反映されない被害もあります。これらは、地区別に調査しており、サルの被害は栃尾地域で発生しています。

（記者）

ドローンを使ってニホンザルの個体数と群れの動きを調べる一番の目的は何ですか。

（環境政策課長）

環境政策的には二つの目的があります。一つは、適正な個体数を維持することで農業被害を防ぐということです。もう一つは、適正頭数を保つことで里にサルが下りてこない環境づくりをすることです。今後、これらの対策を両輪で進めていく上で、ドローンによる調査は有意義だと考えています。

また、適正頭数を保つための捕獲においても、効果的なわなを仕掛けることに役立つと考えています。

（記者）

長岡市としては、ドローンに赤外線カメラを搭載して調査することが初めてということですか。

（農水産政策課長）

昨年度、ドローンに搭載した赤外線カメラでサルとイノシシが写るというところまで実証しています。今回は、初めて長岡技術科学大学の山本准教授に専門的な意見を聞きながら、ドローンによる実際の頭数や群れの調査をします。より正確な調査ができるというところが一段上がったところだと考えています。

（記者）

長岡市が力を入れているＡＩ、ＩｏＴと同じように、先端技術であるドローンを活用した鳥獣被害対策に取り組むことについて、例えば県内のほかの市町村にも広げていきたいなど、今後どのように活用していくお考えですか。

（市長）

ドローンの赤外線カメラによる調査に、山本准教授のノウハウが入り、正確な頭数や生息域を調査する手法としてある程度確立されれば、県やほかの自治体にも使っていただき、県域全体で頭数などを把握してもらいたいと思います。これは、栃尾地域だけ実態を把握して捕獲頭数を増やすなどしても周辺地域から移動してくることが考えられますので、市町村の区域を越えた広域での調査、捕獲、個体数の管理に結び付けないと根本的には問題解決にはならないと思っています。その点では、今年度、県が設置した鳥獣害対策支援センターにも期待しています。

また、ドローンのほか、新しい技術による鳥獣被害対策についても探っていきたいと思っています。

（記者）

サルの場合、人家に侵入したり、自家用食物を荒らしたりするため、人間側が感情的になってしまい、鉄砲で撃てという話になりがちだと聞いたことがあります。しかし、例えば群れの中心的なメスザルを撃ってしまうと群れが分裂して、結果的により被害が拡大することがあると伺っています。このようにむやみに撃つことはかえって被害を拡大しかねないということを、どのように市民へ周知していますか。

（農水産政策課長）

鳥獣被害対策は住民の皆さまと行政が一緒になって取り組むことが一番効果的だと思っており、特に被害の大きな地域では、住民と鳥獣被害対策研修会を開催しています。ご質問の部分や、柿の実を取ることなどは、研修会の中で住民の皆さまに丁寧に説明して、対策を進めていけるよう取り組んでいます。

（記者）

サルは群れで動く動物であるのに対して、イノシシやクマは基本的に個体もしくは親子レベルで動く動物だと認識しています。それを踏まえて、ドローンを共通で使えると考えているのは、どのような場面を想定してのことでしょうか。

（農水産政策課長）

獣種によって、重視する対策は変わります。サルは個体数の管理、イノシシは捕獲数を高めるための効率的なわなの設置、クマは人身被害を防止するための出没地域の把握となります。ドローンがこれらに万能であるとは考えていませんので、活用する場面を広く検討していきたいと思っています。

（記者）

市議会12月定例会で提案しているドローン導入関連予算の予算額を教えてください。

（農水産政策課長）

321万4,000円です。このうちのほとんどがドローンの購入費用です。

（記者）

市内で拡大しているという鳥獣の出没件数について教えてください。

（農水産政策課長）

イノシシとクマについては報告があります。今年度の件数で、イノシシが11月13日現在で目撃64件、痕跡10件で合計74件です。クマが11月24日現在で目撃126件、痕跡86件で合計212件です。

【その他の質問】

（記者）

新型コロナウイルスの感染拡大が続いている中で、ＧｏＴｏキャンペーンを含めた国の対策や県が行っている対策への市長の所感をお聞かせください。

（市長）

ＧｏＴｏキャンペーンがどのくらい感染拡大に影響があるのか、調査する必要があると思います。それが全国的な感染拡大に影響しているのであれば、ＧｏＴｏキャンペーンは一時的に休止すべきだと思います。今までの情報では全国的な感染拡大に大きな影響を及ぼしているという確証がないので、何とも言えないというのが正直なところです。

（記者）

県内での新型コロナウイルスの感染者数が増加しているところですが、危機的状況にあると感じていますか。

（市長）

危機的状況にあるとは考えていませんが、感染拡大が続く首都圏などとの人の交流については、交流が増える年末年始にかけて、要注意のポイントになると思っています。

（記者）

年明けに第四北越銀行が統合して正式に発足しますが、明治時代から長岡空襲、その後の高度経済成長と、長岡の経済を支えてきた北越銀行が一つ区切りを迎えるに当たって、今後への期待など所感を教えてください。

（市長）

現在の経済状況や新型コロナウイルス終息後に経済復興のために、金融機関の持つ役割は本当に大きいと思います。そういった中で合併により、力が大きくなり北越銀行が再出発するということは、長岡の未来にとって期待できることではないかと思っています。

ぜひ、今まで以上に地域の中小企業を含めた産業の育成や下支えを強力に進めていただけるとうれしいと思います。